私立　産業医科大学

プログラムの名称　大学と企業の連携で育成する統合学生支援
――働く人々が求める全人格的な「将来の産業医」の養成を目指して

プログラム担当者　学生部長　教授　上田　陽一

キーワード　1．スタータープラン　2．産学連携メンター制度　3．学生支援ＩＴセンター　4．女子医学生支援　5．健康大学宣言

1．大学の概要

産業医科大学医学部は、産業医学の振興と優れた産業医の養成のために旧労働省の支援の下、1978（昭和53）年に北九州の地にて開学し、翌年には医療技術短期大学が開設された。ここ北九州市は明治から昭和初期にかけて筑豊地区からの石炭輸送の中継地として、また日本最初の製鉄所である官営八幡製鐵所が置かれ、日本の近代産業を支えてきた工業地帯でもある。

1978（昭和53）年の医学部開設の翌年に大学病院の診療が始まり、1996（平成８）年には医療技術短期大学が改組され産業保健学部が開設された。本学は、本年開学30周年を迎えた。本学は、開学以来、働く人々の健康増進を支援し、健康な職場づくりに貢献する広い視野を持った人間性豊かな産業医及び産業保健技術者の養成を目的としてきた。現在、多くの卒業生が産業医や産業保健従事者として全国で活躍している。

2．本プログラムの概要

現在実施されている本学における特色ある学生支援体制（図１参照）として、指導教員制度と企業インターンシップに相当する産業医学現場実習が挙げられる。指導教員制度では、各教員１名が数名の学生を受け持ち、学生の学習面及び生活面の悩み等を個別面談により把握し、適切に指導・助言することを目的としている。実際に問題を抱えた学生を早期に把握することにより適切な対応をとることができた事例があり、目的通りに機能している。また、留年生及び成績下位学生に対しては教員が学習面の個別指導を行う学習指導教員制度が設けられており、学習指導教員が熱心に個別指導を行っている。産業医学現場実習（図２参照）では医学部５年次学生が全国約40ヶ所の事業所に２～３人の小グループに分かれ、産業医の指導の下、実務を現場で直接経験することができる。本実習は、産業医業務に直接触れるのみならず、学生自らがいかに社会的に未成熟であるかということを認識し、かつ人間的な成長を促すよい機会となっている。

本プログラムでは、本学が開学以来実施してきた学生支援体制を見直し、大学と企業、ひいては地域との力を合わせた新たな統合学生支援体制を構築することによって、広い視野と豊かな人間性を持った将来の産業医を養成することを目的とする。

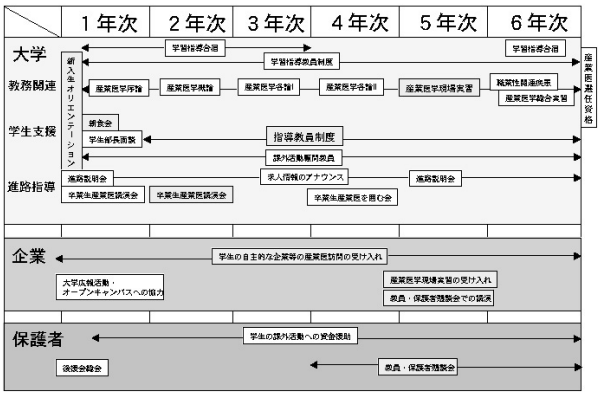

図１ 本プログラムに関連する現在の取組

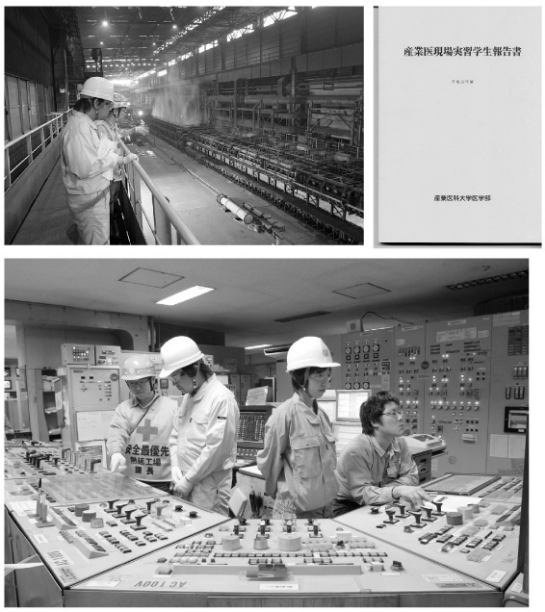

図２ 産業医学現場実習の様子と報告書

具体的には、現在行っている学生支援を更に統合・発展させ、産業現場（企業）や卒業生産業医からの情報を統合・一元化（学生支援ＩＴセンターの設立）し、その情報源に学生が気軽にアクセスすることができるように整備（e-モバイルの貸与）し、一般社会人として大切な価値観、健康観、人生観を育む環境（働く人々の健康を支える大学）を整え、高いコミュニケーション能力（産学連携メンター制度）と人間性豊かで実践力を備えた「将来の産業医」を育成することを目標としている。そのために、入学（新入生スタータープラン）から卒業まで女子医学生の支援を含め、学生の自主性を養成する統合学生支援体制を構築する。

3．本プログラムの趣旨・目的

近年、産業構造や就業体系が大きく変化し、職場において強い不安やストレスを感じる労働者の数は増加傾向にある。過重労働などに伴う心身の疲労は様々な疾病の発症に強く関与していることは明らかである。増加の一途をたどる働き盛り世代の自殺者を防ぐための早急な対応、労働年齢の高齢化への対応、2008（平成20）年度より開始された特定健康診査・特定保健指導、いわゆる「メタボ健診」への対応等、労働現場におけるプロフェッショナル医療人の養成（社会的ニーズ）が急務となっている。これらの課題に対応し解決する人材を養成することが本学の使命である。

本学では３年前からの入試改革により、これまでにも増して、本学への入学を強く希望し、かつ、将来は産業医として活躍したいという明確な志を持った入学生を選抜してきた。とはいえ、将来の産業医に求められる豊かな人間性や社会性は未熟であることは言うまでもない。従って、学生の頃から産業社会の現場を実際に肌で触れて感じ、産業医に対して企業や労働者がどのようなことを求めているのかを自ら考えることが重要である。本プログラムでは、このような社会的ニーズ及び学生のニーズを踏まえ、働く人々の健康増進や健康な職場づくりに貢献する人間性豊かで実践力を備えた「将来の産業医」を養成するため、大学と企業、ひいては地域と力を合わせた学生支援を実施することとした。

4. 本プログラムの独自性（工夫されている内容）

本プログラムにおいて新たな取組として以下の５つのプラン（図３参照）を設定した。

5つのプラン	
	１）トータル支援（新入生スタータープランを含む）
	２）人間力育成（産学連携メンター制度）
	３）情報の統合・発信（学生支援ITセンターの設立）
	４）学生相談強化（女子学生支援を含む）
	５）健康意識向上（働く人々のための健康大学宣言）

図３ ５つのプラン

（1）トータル支援（新入生スタータープランを含む）

入学から卒業まで産業現場（企業）との連携を図り、入学時の「産業医になりたい」というモチベーションを維持・向上させる。これまでは、新入生オリエンテーション、進路指導、卒業生産業医講演会や語る会、産業医学現場実習等を実践してきた。これに加えて、低学年次のうちに産業医活動の現場を見学し（産業医オフィス訪問）、産業医の業務を肌で体験（１日産業医体験、産業医ホームステイ）すること、労働者の立場から産業現場を知ること（ワーキングホリデー）等を実践する。この実践に当たっては、本学卒業生産業医及び産業保健技術者によって組織された産業医学推進研究会との連携を図る。また、生活リズムを形成するための朝食会（現行では５月連休明けの３日間）を拡大する。

（2）人間力育成（産学連携メンター制度の導入）

人間性豊かな将来の産業医には高いコミュニケーション能力が必要とされる。開学以来、学生指導に効果を上げている指導教員制度に加え、新たに産学連携メンター制度を導入する。現行の指導教員制度はあくまで教員―学生の関係に基づいた指導体制である。ここに、先輩（メンター）―後輩（メンティ）、卒業生産業医・産業医経験教員（メンター）―在学生（メンティ）の双方向性の相互支援制度を導入する。メンターとメンティの対話を通して、お互いの信頼関係を築きながらコミュニケーション能力を鍛え、お互いの人間的な成長（人間力育成）を促す。

（3）情報の統合・発信（学生支援ＩＴセンターの設立）

現在学内では、学内ネットワークが整備され、本年５月より学内無線LANが始動したところである。学生支援に関する情報を一元化するために学生支援ＩＴセンターを設置する。ここでは、現行の学生掲示板機能を電子化（学生を導く羅針盤機能を有するという意味をこめて仮称「らしんばん」と呼ぶ）し、進路指導部をはじめ関係部署と連携して企業、産業医（産業医学推進研究会等）、地域社会、学外の学生支援組織（後

援会等）からの情報を集積し、学生に提供する。学生に端末機器（e-モバイル）を貸与し、学内でいつでもアクセスできる状態にする。

（4）学生相談強化（女子学生支援を含む）

学生の悩みに耳を傾けそれを解決するための現行の取組としては、指導教員制度、学生相談室などが機能している。また、教員・保護者懇談会の開催（２年に一回本学でのみ開催）により、保護者の理解と協力を得る努力をしている。今後、保護者の利便を考慮し懇談会をブロック別（関東、近畿など）に実施し、学生が抱える悩みを保護者とも一体となって解決するよう努力する。2008（平成20）年４月現在、本学医学部学生数594名のうち女子学生数は192名と３分の１近くになる。卒業生女性医師及び女性教員の自主的な集まりであるアリスの会とも連携しながら、女子医学生が先輩女性医師の実体験、各職場での支援体制について気軽に相談できる体制を構築する。

（5）健康意識向上（働く人々の健康を支える大学）

本学は働く人々の健康を支える人材を養成することを使命とする目的大学である。産業医学・産業保健は、総合的な企業の健康な職場づくり（健康企業）を目的としている。従って、本学自身が「健康大学」の模範を示さなければならない。更に、本学に集う学生の健康意識は極めて高いものが求められる。ここに、働く人々の「健康大学」を宣言することにより学生の健康意識向上に努める。学生の自主性を養成するために、学生自身のアイディア・企画による健康フェア、地域住民が参加する健康に関する講演会、学生ボランティア活動等を支援する。

5．本プログラムの有効性（効果）

本プログラムを通して、学生の立場で産業医の活動を実際に、もしくは模擬的に体験することで、「産業医になりたい」というモチベーションを維持・向上することができる。更に、学生時代から、実際に行われている産業保健を直接または間接的に経験することにより、産業現場でどのような社会的ニーズがあるのかを肌で感じることができる。加えて、様々な職種で働く人々の働き方・人生観等を知ることは、幅広い視野で物事を考える広い視野を持った人間性豊かな医師の養成に寄与すると考えられる。

また、そこで生じた疑問や問題点を解決するためにいつでも一元化された情報源にアクセスするシステムを提供することにより、必要な情報を探索しようという学生の積極性を高めることができる。

新たな取組の５つのプラン別にその効果を列挙すると、(1) トータル支援では、低学年から産業現場そして産業医の活躍を実際に見聞することにより「産業医になりたい」というモチベーションの維持・向上に役立つ、(2) 人間力育成では、メンターとメンティの信頼関係を構築する過程において、高いコミュニケーション能力が開発され、人間的な成長を促す効果が期待される、(3) 情報の統合・発信では、学生支援に関する学内外の情報の一元化による効率化、学生の自己評価システムを導入すること等により学生の自主性の養成に役立つ、(4) 学生相談強化では、学生が抱える悩み（女子医学生特有の悩みも含む）を保護者とも一体となって解決に導く効果が期待される、(5) 健康意識向上では、働く人々の健康を支える大学の学生であることを自覚するよい契機となることが期待される。

6．本プログラムの改善・評価

本プログラムの新たな取組の評価組織として、大学内に学生支援プログラム評価委員会を設置する。この評価委員会は、内部評価委員（学生代表も含む）及び外部評価委員（産業医代表、地域代表を含む）で構成し、年度毎の実施評価を行う。学生へのアンケート、学生支援ＩＴセンターへのアクセス件数、具体的な事例の実施状況などを総合的に評価し、プログラムの改善を図る。産学連携メンター制度の円滑な運営のために、メンターのFDを実施する。

7．本プログラムの実現可能性・将来性

この新たな取組によって、学内の学生支援の個々の取組や学生支援組織の種々の情報を学生支援ＩＴセンターの設置により一元化し、学内外の産業医、企業ひいては地域社会と大学との連携を形成することが実現可能となる（図４参照）。

本プロジェクトは、以下の４ヶ年計画で実施する予定である（図５参照）。

2008（平成20）年度

新入生スタータープラン策定及び実行１年目、産学連携メンター制度策定及び登録開始、学生支援ＩＴセンター立ち上げ（初期設定）、ホームページ作成及び一部試験的に開設、２学年（計200名）

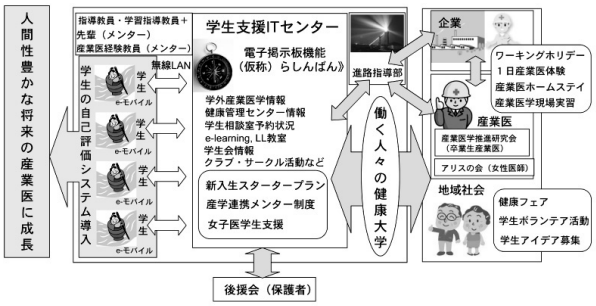

図４ 本プログラムの統合学生支援の概念図

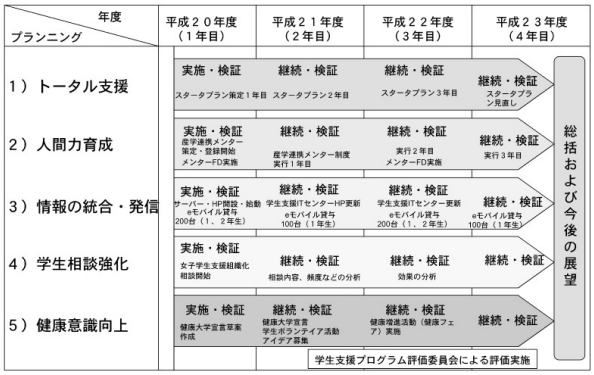

図５ 新たな取組の４ヶ年計画

への e-モバイルの貸与と試験運用、女子医学生支援連絡網の整備、働く人々の健康大学宣言草案作成。

2009（平成21）年度

新入生スタータープラン実行２年目、産学連携メンター制度実行１年目、学生支援ＩＴセンターホームページ更新と１学年（計100名）への e-モバイルの貸与、女子医学生支援活動開始、働く人々の健康大学宣言、学生ボランティア活動アイディア募集。

2010（平成22）年度

新入生スタータープラン実行３年目、産学連携メンター制度実行２年目、学生支援ＩＴセンターホームページ更新と２学年（計200名）への e-モバイルの貸与、女子医学生支援活動継続、働く人々の健康大学宣言に基づく学生と企業と地域が一体となった健康増進活動（健康フェア）の実施。

2011（平成23）年度

新入生スタータープランの見直し・評価及び改善、産学連携メンター制度の見直し・評価及び改善、１学年（計100名）への e-モバイルの貸与（この年度ですべての学年次生が e-モバイルを携帯することになる）及び本格運用実施、学生支援ＩＴセンターホームページ運用の利用頻度・利便性などの見直し、女子医学生支援活動の総括と今後の展望、働く人々の健康大学宣言、健康フェアの効果検証とその後の総括及び今後の展望を行う。

選　定　理　由

産業医科大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を長期に渡り具体的かつ組織的に実施しており、その結果は、「産業医学現場実習」や「指導教員制度」において実証されるように、大きな成果を上げていると言えます。

今回申請のあった「大学と企業の連携で育成する統合学生支援」の取組は、新入生の段階から産業医としてのキャリアを具体的にイメージできる機会を設け、また、卒業生産業医を通して産学連携を実現することによって優れた産業医を養成しようとするもので、貴学の特徴に配慮した優れた取組です。また、女子学生の支援、卒業生の支援も意義ある取組であると評価できます。

全体としてそれぞれの支援のプロセスが明確であり、他に見られない工夫ある取組であり、職業に直結した一般大学等の学生支援の参考となる優れた取組であると言えます。